鈴鹿医療科学大学

2017年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

放射線技術科学科	
３つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:鎮西康雄（教務・教育改革担当副学長） 分担者:各学科長、各専攻長、 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2017年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注１など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注２）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 評価基準が作成されていない科目がある。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（合否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** できる内容の講義では行われている。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** シラバスに適切な評価方法が記載されている。

	④各科目の合否の判定（単位認定）に加えてGPA 注３による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものですが、進級、卒業（学位授与）、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。３年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 確認試験は行われている。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動（PDCA活動 注４）を促します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** ガイダンスや面談で指導している。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数（入学時資格取得希望者数）あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 下位学年の講義の中に国試問題を意識させる。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 学生の意識調査を行う。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善（FD 注５活動）を不断に継続していきます。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** FDの授業評価を参考に改善を行っている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 臨床実習先での本学の教育に対する評価を活用している。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより（IR 注６）、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容**

	IR との連携を行っている。

鈴鹿医療科学大学

2017年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療栄養学科・管理栄養学専攻	
３つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:鎮西康雄（教務・教育改革担当副学長） 分担者:各学科長、各専攻長、 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2017年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注１など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注２）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □A100%　B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 講義についてはシラバスで授業内容を事前に提示し、学生は予習を行った上での授業への参加を求めている。ただし、その実行を評価する体制が十分ではなく、学生の自主的な学習には必ずしも結びついておらず、今後の課題である。 実習においては座学の知識を技術的応用に生かす能力涵養を確認する観点から、求める習熟度の到達点を明示し、実習内容のプレゼンテーション能力も評価する基準を設けている。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（合否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 「形成的評価」として講義ごとに小テストを課して、理解到達度を確認し、かつ添削による理解深度の向上を目指す授業の取り組みが行われている。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。

	全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 定期試験が一応のマイルストーンであるが、専攻の専門性としてのアウトカムを認識する場として3年生と4年生で臨地実習があるので、臨地実習の事前及び事後の評価を教員と学生が一緒に考察することで学生の自覚と自信の推進に繋げている。 ④各科目の合否の判定（単位認定）に加えてGPA 注3による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものですが、進級、卒業（学位授与）、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期基礎栄養、生化学実習において学内教員による確認試験を導入する。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** すでに実施済みである ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA活動 注4）を促します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 各種授業評価を通じて、学生の学習への取り組みを自己評価させることが行われている。学生の学習態度向上に関して学生から教員への希望がどのようなものかは十分な意見が上がっている状況ではないことは課題であると認識している。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数（入学時資格取得希望者数）あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 2017年度の管理栄養士国家試験合格率は100%を達成し、上記目標は達成できた。さらに4年生は1名の留年者もなく国家試験合格が実現できた。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □A100%　■B80%　C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 学生の技能や態度の評価は必ずしも容易ではないが、臨地実習における学外の方からの学生の評価としては概ね良好であるが、一部に芳しくないものも見られることから、評価基準の改善が必要

	と考える。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善（FD 注５活動）を不断に継続していきます。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 上記事項は実施している。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 大学評価の重要なポイントであるが、卒業生からの意見聴取の機会は底力教育の一部でなされるのみであり、当該専攻として今後とも取り組むべき課題である。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより（IR 注６）、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 大学から配分される分析データは教員個々に渡っており、カリキュラム、教育内容などの分析改善に用いられている。

鈴鹿医療科学大学

2017年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療栄養学科・臨床検査学専攻	
３つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:鎮西康雄（教務・教育改革担当副学長） 分担者:各学科長、各専攻長、 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2017年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	① 学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注１など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注２）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 演習科目でのプレゼンテーションの評価や実習科目における実技試験や実習への取り組み態度の評価は、実際ほとんどの対象授業で行っているが、ルーブリック形式の評価は行っていない。 ② 学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（合否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** ４年次の総合演習ⅠおよびⅡでは模擬試験を数回組み入れ、また、（臨床）微生物学などの一部の講義では、毎回復習小テストを行い、学習成果をモニタリングしている。 ③ 各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。

	全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 □A100%　□B80%　□C50%　■D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 臨床微生物学実習など一部の授業では、最後の課題として、「臨床検体をイメージされた未知検体の同定」を行わせることにより、目標達成度を各自確認させている。 ④ 各科目の合否の判定（単位認定）に加えてGPA 注３による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものですが、進級、卒業（学位授与）、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** GPA2.0未満の学生は国家試験に殆ど合格しない事実を基に、2年次には強制的に、その他の学年では適時三者面談を実施し、学生・保護者・教員が三位一体となって、学習・生活指導を行っている。 ⑤ 学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動（PDCA活動 注４）を促します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 再試験科目多い学生に対しては、担任が中心となり面談を行い学修行動の振り返りを含めて指導している。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	① 各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数（入学時資格取得希望者数）あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 国家試験合格率は、全国平均をやや上回っている。 ② 技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □A100%　□B80%　□C50%　■D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 2018年度からの対応を検討している。

	③ 各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善（FD 注５活動）を不断に継続していきます。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 全教員が毎回 FD に参加し、授業改善に努めている。また、学生の授業評価を基に自己評価を行った。 ④ 卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 臨床実習先の技師長等をお呼びしての臨床実習前説明会や臨床実習報告会における技師長等の意見を尊重し、臨床実習前事前指導の改善を行っている。 ⑤ 以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより（IR 注６）、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** IR 推進室の分析報告に基づき、教授方法の改善に向けて検討しているが、まだ十分科学的根拠に基づいた教育課程の改善を行っているとは言い難い。

鈴鹿医療科学大学

2017年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

理学療法学科	
３つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:鎮西康雄（教務・教育改革担当副学長） 分担者:各学科長、各専攻長、 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2017年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注１など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注２）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 技能・態度の評価に関し、学外実習に特に必要となる技能はOSCEを導入し、評価方法の改善に努めている。さらに他の実習科目においてルーブリックを作成し、評価方法の検討を行っている。学習ポートフォリオ活用については今後の検討課題である。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（合否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 国家試験のための模擬試験は全学年において実施した。各授業において小テストの実施にも取り組んでいる。繰り返し回数については検討が必要である。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階

	において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** ２～４年次の学外実習前に実習に必要な到達レベルの確認、実習後指導により自身の達成度の把握を行わせている。 ④各科目の合否の判定（単位認定）に加えてGPA 注３による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものですが、進級、卒業（学位授与）、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** GPAの値や変動を確認し、成績不振や低下した学生に対して面談を実施し修学指導を実施している。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動（PDCA活動 注４）を促します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 学習態度や成績が良くない学生に対し学外実習前後、学期末などに面談を行い、自身の課題と対策について考えさせる機会を設けている。どのレベルの学生に行うか検討が必要である。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数（入学時資格取得希望者数）あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 例年，全国平均より高い国家試験合格率を維持している。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 技能や態度への教育効果については特に臨床実習科目において日本理学療法士協会の標準的な評価尺度を参考に手引き書を作成，活用している。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善（FD 注５活動）を不断に継続していきます。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満

	上記達成状況の具体的内容 定期的に学生の授業評価を実施し，教育改善に活用している． ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 上記達成状況の具体的内容　本学科では臨床実習施設と就職先の多くが重複しており，年4回の臨床実習の際と，年1回の臨床実習指導者会議において意見を聴取する機会を設けている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより（IR 注6）、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 上記達成状況の具体的内容 教育課程改善の参考にIRのデータを活用している。

鈴鹿医療科学大学

2017年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療福祉学科・医療福祉学専攻	
３つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:鎮西康雄（教務・教育改革担当副学長） 分担者:各学科長、各専攻長、 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2017年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注１など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注２）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 講義科目での知識を問う試験では学修成果を客観的に評価することはできていたが、演習や実習での評価については適切な評価尺度が整っていなかった。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（合否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 科目によっては中間試験を実施して学修成果の到達度を把握してそれ以降の講義の進め方に参考としたり、小テストを14回中2回程度実施したりした科目もあったが、医療福祉学専攻全体の取り組みにまでは至っていなかった。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法

	で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 3年生については相談援助実習を通して、ソーシャルワーカーとして目指すべき姿を知り、その水準と学生自身の立ち位置との距離感を実感できた。4年生については国家試験対策の中で全国統一模擬試験等の結果から、国家試験合格ラインと学生自身の学力との開きを実感できたが、他の学年についてはそのような体験はできなかった。 ④各科目の合否の判定（単位認定）に加えてGPA 注3による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものですが、進級、卒業（学位授与）、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 相談援助実習は2年後期の相談援助実習指導Ⅰから3年前期の相談援助実習指導Ⅱに推移する時点で、習熟度テストを実施し実習の可否を決めているが、GPAによる評価はこの時点では参考にされていない。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動（PDCA活動 注4）を促します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 事前学習や事後学習の一つとしてレポート提出の課題を出したり、予習復習を促す声掛けをしたりしたが、主体的に学習に取り組む態度を育成できたとは判断できない。ただし、卒業論文についてはゼミ担当教員から指導を受けながら、学生が主体的に取り組んでいる。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数（入学時資格取得希望者数）あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 当該年度の国家試験の合格率は、社会福祉士が61.4%、精神保健福祉士が100%であった。社会福祉士は全国私立大学・受験者10人以上の養成施設177校中39位、東海4県同条件18校中5位であり、精神保健福祉士は全国及び東海4県でも1位という結果であった。国家試験対策講座や国家試験受験に向けた学生指導が奏功した結果と考える。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満

	上記達成状況の具体的内容 国家試験対策の一つとして、専門職団体や養成施設団体及び予備校が実施する全国規模の統一模擬試験に４回参加し、それらの結果に学内教員が作成した試験問題による学内模擬試験結果を加えて、それらの順位を経時的にグラフ化し、視覚的に学生が自分自身の学習成果の変化を確認できるようにしている。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善（FD 注５活動）を不断に継続していきます。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 上記達成状況の具体的内容 普段の学習成果については、クラス担任やゼミ担当教員がサムスポや小テストや中間テスト、レポート課題等を通じて学生の理解度を把握しながら個別に授業改善に取り組んでいる。また国家試験対策の一環として実施している個別面談の中で学生の自宅学習の様子を聞き取りながら、学生の能力に応じた学習方法の助言や励ましをおこなっている。しかし、学科として組織的に教育課程の改善が不断におこなわれているとはまだ言い難い。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 上記達成状況の具体的内容 実習連絡会や実習報告会で実習先に就職している卒業生の状況について話が出ることがある。また、専門職団体の活動や施設や病院等の視察研修を通じて、卒業生の状況を把握することがある。これらの中には定期開催をしているものもあるが、本学の教育に対する評価にまで踏み込んだ内容の話しは単発的であり、教育過程の改善に反映されるところまでには至っていない。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより（IR 注６）、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 上記達成状況の具体的内容 国家試験受験者については、模擬試験結果のデータ化ができており、科学的根拠に基づいて学生指導ができるようになっているが、国家試験を受験しない学生については学習成果の分析や評価は進んでおらず、科学的根拠に基づいた学生指導ができているとは言えない状況である。

鈴鹿医療科学大学

2017年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療福祉学科・臨床心理学専攻	
３つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:鎮西康雄（教務・教育改革担当副学長） 分担者:各学科長、各専攻長、 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2017年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注１など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注２）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 実習，演習科目においては，各科目担当者が評価基準を提示して評価している。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（合否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 公認心理師試験対策は来年度以降になるため，その準備段階である。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満

	上記達成状況の具体的内容 公認心理師カリキュラムには，達成基準があるので，それを使用して達成度を学生に自ら自覚させるよう準備を行った。 ④各科目の合否の判定（単位認定）に加えてGPA 注３による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものですが、進級、卒業（学位授与）、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。３年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** GPAは大学院１次審査免除に利用しているので，本学大学院進学希望者はGPAを意識して学んでいる。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動（PDCA活動 注４）を促します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 大学院生と学部生の学びを通した交流を行うピアサポーターの準備を行った。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数（入学時資格取得希望者数）あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □A100%　□B80%　□C50%　■D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 2018年度に行われる第１回公認心理師試験対策については，実際に受験する教員を中心に情報収集を行った。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □A100%　□B80%　□C50%　■D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善（FD 注５活動）を不断に継続していきます。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 授業評価や振り返りシートにおけるコメントへのフィードバックを行い，授業改善に役立てている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容**

	福祉領域での評価が高く，臨床心理学専攻の教育方針が実っていると評価している。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより（IR 注６）、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 今後の課題です。

鈴鹿医療科学大学

2017年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

鍼灸サイエンス学科	
３つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:鎮西康雄（教務・教育改革担当副学長） 分担者:各学科長、各専攻長、 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2017年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注１など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注２）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 知識や思考力の評価方法は試験、技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度を用いる評価方法を活用している。評価尺度については、事前に説明し、その学習方法について個別に面談している。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（合否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 形成的評価については、国家試験および最終的総括評価（合否の判定）の２つを重点的に強化している。国家試験は、学生の習熟度に合わせた実力テスト、模擬テストを提供し、底上げを目的として提供している。総合評価は、必要な水準に達成できるまで、繰り返し実施している。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏

	んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 全科目について、面談にて個別に把握するように指導している。評価方法としては、演習・実技科目については詳細な把握ができるよう調整されているが、講義科目では、一部徹底されていない部分もある。 ④各科目の合否の判定（単位認定）に加えてGPA 注3による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものですが、進級、卒業（学位授与）、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** GPAを進級、卒業、国家試験合格の目安として指導に活用している。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動（PDCA活動 注4）を促します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 個別面談の中で活用し、学生の自己改善に結びつけている。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数（入学時資格取得希望者数）あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 2017 年度 4 年生のはり師、きゅう師国家試験の受験者合格率は80%（鍼灸系大学中でトップ）であったが、入学者あたりの合格率は43%と目標には達しなかった。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 教育効果を高めるために、学科評価と全学的調査を含めて、評価指導している。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善（FD 注5活動）を不断に継続していきます。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満

	上記達成状況の具体的内容 学生の授業評価に基づき、担当教員の教育改善を継続している。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 客観的評価はないが、口答による主観的評価や意見を聴取して、教育課程の向上に生かしている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより（IR 注６）、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** IR での分析結果に基づき、国家試験対策や教育課程の改善に取り組んでいる。

鈴鹿医療科学大学

2017年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

臨床工学科	
３つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:鎮西康雄（教務・教育改革担当副学長） 分担者:各学科長、各専攻長、 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2017年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注１など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注２）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 講義科目においては、従来から行われている試験やレポートによる知識の確認を行い、実習科目では、実技やレポート、テスト、さらに口頭試験により知識と実技の達成度を評価尺度とした。 生体機能代行装置学実習Ⅰ、Ⅱ等の実技項目、口頭試問においてルーブリックを取り入れた達成度を評価尺度とした。 学修ポートフォリオの活用は未達成である。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（合否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 各講義で行われる小テストや宿題等の「形成的評価」は、講義内または学期中間期に行われ、単位認定を行う「総括的評価」である定期試験・再試験と組み合わされて学生評価が行われた。 資格試験（ME2種）対策として、頻出問題にて夏期に補講が行われた。 国家試験に対して前期・後期を通して、過去に出題された国家試験問題をランダムに繰り返した。

	③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 一部実習において、実際に病院で行う技能について、ルーブリック的評価を採用し、アウトカムの確認の後、単位認定を行った。 ＭＥ２種実力検定合格が国家試験合格までの最初のマイルストーンと位置づけられ、最終的な目標達成のためのマイルストーンとして全国統一模擬試験の合格ライン突破が位置づけられた。 ④各科目の合否の判定（単位認定）に加えてGPA 注３による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものですが、進級、卒業（学位授与）、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** GPAは奨学金審査の他、担任による学生面談時の学力の目安や2年次後期に要面談学生（父母面談）の判断にも活用されている。3年前期学内実習での確認試験は導入されていない。 留年学生のGPAは、低い傾向がみられた。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動（PDCA活動 注４）を促します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 担任による面談をとおして、成績状況や日頃の学習態度について生活指導を行い、出席状況の改善や学習計画の立案等を促した。学生自らの学習行動の振り返りについては未確認である。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数（入学時資格取得希望者数）あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 本年度の新卒37名中31名が合格となり、新卒の合格率83.8%は全国平均(82.8%)を僅かに上回り、本学の新卒＋既卒合格率84.6%も全国平均(73.7%)を上回った。受験学年の入学者は50名で同入学年4年後の合格者の割合は52%であった。今回の既卒者の合格率は100%となった。

	②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** ルーブリックによる評価は、実習の一部で活用されており、全学的な学力試験は入学直後のプレースメントテスト後、リメディアル教育が行われた。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善（FD 注５活動）を不断に継続していきます。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 学生による授業評価が行われている。年に複数回のＦＤ活動にもほとんどの教員が毎回参加しており、ＦＤ活動に位置づけられる大学院セミナーへの参加も認められた。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □A100%　□B80%　□C50%　■D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 臨床実習施設による実習学生の評価が行われた。現在の所、卒業生や就職先機関による本学科教育に対する評価は行われていない。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより（IR 注６）、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 入試形態別学生成績や高校の成績との関連が分析報告された。

2017年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医用情報工学科	
３つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:鎮西康雄（教務・教育改革担当副学長） 分担者:各学科長、各専攻長、 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2017年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注１など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注２）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** １年生医療情報セミナー、２年生医療情報セミナーⅠ・Ⅱは学生の個性や資質を理解し、育てることが目的の科目です。グループ学習を通じてこの目的を達成しようとしています。この科目の現在の評価方法は担当教員による総合評価です。十分な評価データを得ることが困難なグループ学習のテーマもあり、学生自らが学修過程ならびに学修成果をレポートとして提出させて評価情報としています。これらを束ね、学生に還元することで学習ポートフォリオの第一歩となるのかもしれませんが、まだ、意識が高まっていません。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（合否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 定期試験以外にも小試験や個別指導なども行われており、この点については、各教員は意識して取り組んでいると判断して良いと思います。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカ

	ム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 1年生医療情報セミナーと2年生医療情報セミナーⅠ・Ⅱは、この科目の目的が個々の学生の資質を把握し、学生自らも目標達成に至る自分の立ち位置を明確にして今後の意識付けをすることなので、これらの科目群に限定すれば100%達成していると言って構いません。しかし、この項の主題は、4年間の教育プロセスの中で各科目の担当範囲と到達内容を明確にし、それがどれだけ達成されたかを見ることです。この観点から言えば50%が妥当な線だと思います。医用情報工学科は、入学時の学生の希望も能力も極めて幅が広く、各教科で教える内容も年によってその難易度を変更せざるを得ないのが現状です。分野毎に各科目での教育範囲を議論して科目設計と配置をしていますが、設計どおりには教育が進みません。そこで、学科として重要な教科についてはその内容を主に担当する教員を一人決めて、基本的にその教科に纏わる科目群を全て教えるという戦術を取っています。 ④各科目の合否の判定（単位認定）に加えてGPA 注3による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものですが、進級、卒業（学位授与）、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 □A100%　□B80%　□C50%　■D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 学科としてGPAの値は余り重視していません。学科の人材育成目標に、個別の学生の資質を入学後の早い段階で把握し育てる、といった趣旨のことを掲げていますが、このこととGPAの計算方法とがマッチしないからです。学科としては、GPAの値が低くくても色々な科目に挑戦し、学ぶ学生の方が未来が明るいと見ています。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動（PDCA活動 注4）を促します。 □A100%　□B80%　□C50%　■D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 一部の科目では実行していますが、全体では行われていません。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数（入学時資格取得希望者数）あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。

	□A100%　□B80%　□C50%　■D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 資格試験の成績を科目成績に加味することはありません。尤も、資格試験を合格した学生の科目成績は総じて高いので加味する必要も無いのが現状です。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □A100%　□B80%　□C50%　■D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 全学的な学修行動調査や意識調査による評価はまだ手がけていません。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善（FD 注５活動）を不断に継続していきます。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 80%は少し過大評価ですが、50%は低すぎるので 80%に落ち着かせます。数名の教員のところに結構沢山の学生が相談に来ています。担当教科以外の話も相談しています。また、一部の科目では授業中に学生に意見を求めることも行われています。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 講義の中で先輩の話を聞く機会を設けています。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより（IR 注６）、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □A100%　□B80%　□C50%　■D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 学科としてこの件に関しては取り組めていません。

2017年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

薬学科	
３つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:鎮西康雄（教務・教育改革担当副学長） 分担者:各学科長、各専攻長、 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2017年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注１など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注２）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 卒業研究には客観的評価（ルーブリック）を導入済みであり、今後、実習等にも客観的評価（ルーブリック）を導入する予定である（一部実習には導入済み）。学修ポートフォリオについては全学で導入する予定であり、薬学部でも学修ポートフォリオの活用を検討している。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（合否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 多くの教科で「形成的評価」を取り入れており、また「総括的評価」においても学期終了時のみならず、学期中間時にも実施する教科が多数ある。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階

	において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 □A100%　□B80%　□C50%　■D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** カリキュラムマップを活用し、アウトカムベースの学習法を習得できるよう指導を行っていく予定である。 ④各科目の合否の判定（単位認定）に加えてGPA 注３による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものですが、進級、卒業（学位授与）、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。３年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** GPAに基づく学修指導を行うとともに、個々の学生が各々の成績を把握し、モチベーションの向上に役立てられるようGPAのヒストグラムを開示していく予定である。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動（PDCA活動 注４）を促します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** ６年次の成績不振な学生を対象に、学習状況を表記させ、学習状況の改善を図っている。今後は、成績不振の学年にも同様な取り組みを求めていく。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数（入学時資格取得希望者数）あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 上記目標を達成するために次の教育指導を実施する。 <u>初年次から卒業までの一貫した国家試験対策</u> １年次には基礎物理化学、基礎化学、基礎生物学の講義でリメディアル教育を実施した。専門科目では改訂薬学コマカリキュラムに則り授業を構築し、定期試験等で適切に過去問等を利用した。年間を通じた薬学総合演習の結果、2017年度の共用試験CBT平均得点率は速報値で76%、80%以上が40名であった。5年次で国家試験過去問をベースにした4回の試験を実施して学生の進捗状況を確認した。実務実習に関連した国家試験問題を事前に学習させ、実習内容と国家試験の解法に役立つことを実感させた。

	得点力向上を目指した６年次での対策 ６年次前期に「２週間の講義＋単位認定試験」のユニットを６セット実施し学生個々の学習到達度を小刻みに確認できるようにした結果、昨年よりも早めに真剣に学習に取り組んだ。８月から合計８回の模擬試験（２日間）を実施し、学生の学習到達状況を分析し、後期の対策に活用した。試験毎に自己採点結果を担任と共有し、担任は学生の生活管理とメンタルケアを実施した。さらに講義の確認試験を毎月実施し、成績不振の学生には以下の特別講義への参加を義務付けた。１）特別補講（復習の機会の創出）２）得点しやすい必須問題の特訓対策講義（10 回実施）（模試での得点力の向上に寄与）３）助手・助教の自発的活動組織である「エンカレッジセンター」による家庭教師的な模擬試験の徹底解説講義。また、年間を通した全教員による生活管理とメンタルケアの結果、大きく体調を崩す学生がいなかった。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 卒業研究、薬理学実習、医療薬学演習、基礎薬学演習については評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価を行っている。が、その他の実習についてはこれから随時ルーブリック評価を行う予定としている。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善（FD 注５活動）を不断に継続していきます。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 学生の授業評価は、各期におこなっており、それらの結果は教員にフィードバックされている。また、教育課程の改善（FD 活動）については大学で行われている FD 講演会と同時に薬学部でも毎年おこなっている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価については、各教員が個別に聞き取り評価を行っている。今後、これらの意見を集約して改善につなげる。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより（IR 注６）、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 国家試験合格率について、入試、プレースメントテスト、CBT テスト、６年生での各模試の結果について IR で分析を行ってきた。今後とも解析をおこない科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図る。

鈴鹿医療科学大学

2017年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

看護学科	
３つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:鎮西康雄（教務・教育改革担当副学長） 分担者:各学科長、各専攻長、 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2017年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注１など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注２）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** ３・４年次看護学実習科目や４年次統合科目「看護の統合Ⅰ」では知識・技術・態度についての評価表に基づいて評価している。講義科目については、各担当教員にルーブリック評価を意識して評価することを周知しており、「卒業課題」の評価もルーブリックを用いることができるかを検討し、2019年度からの採用をめざしている。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（合否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 各講義科目では、講義の必要な段階で形成的評価を取り入れており、最終的な総括評価につなげて実施している。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法

	で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 年度開始時における、学生担当教員と学生との面談時にカリキュラムマップを使用して各自の成績確認を行っている。また、各看護学の学内演習や実習においては、自己評価表などを用いながら学生の到達度の確認と学生へのコメントを行っている。臨地実習科目においては、看護技術到達度表を用いて、何を経験し何ができるようになったかを確認できるようにしている。 ④各科目の合否の判定（単位認定）に加えてGPA 注3による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものですが、進級、卒業（学位授与）、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 3年次進級要件として1・2年次の専門基礎・専門分野の必修科目単位をすべて修得していることとしており、3年次後期臨地実習を履修できるか否かを評価している。あわせて、それまでのGPA２．０未満の学生は、保護者を加えた三者面談を行い、これまでの学修課題を明確にして、今後に向けての学修計画を立てさせている。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動（PDCA活動 注4）を促します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 学生担当教員と学生との面談の中で、各自の取り組むべき課題を明らかにしながら1年間の学修計画を作成し、個々の学生に応じた学修指導・生活指導を行っている。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数（入学時資格取得希望者数）あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 完成年度を迎え、第1期生の学生の科目成績や国家試験模擬試験結果と国家試験結果との関連についてIRでの分析結果を得た。また、看護師国家試験対策の外部講師に国家試験対策と学生成績など全体を分析してもらった。これらを参考にして、統合科目である「看護の統合Ⅱ（知識の統合）」について今後の教育内容・学修指導方法に活用していく予定である。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度（ルーブリックなど）を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容**

	全学で行われている学修行動調査や意識調査を実施し、看護学科での特徴を整理しているが、第１期生を送り出したばかりであるので、今後、データを積み重ねて活用していきたい。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善（FD 注５活動）を不断に継続していきます。 □A100%　■B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 学生の授業評価や教員の自己評価を実施している。その内容を踏まえて、次年度の教育方法の改善点を明確にして、シラバス等を通して、学生に周知している。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □A100%　□B80%　■C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 完成年度を迎えて第１期生が卒業したばかりであるので、学部の教育に関する評価は得ていないが、今後検討していきたい。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより（IR 注６）、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ■A100%　□B80%　□C50%　□D50%未満 **上記達成状況の具体的内容** 看護学部では開学２年目と完成年度を迎えた昨年度末に IR への分析を依頼したので、入試形態、GPA、各科目成績、模擬試験成績等の分析について、今後、データを積み重ねていきたい。